

YouTube をご覧の皆様、こんばんは。本日は『ざっくり黙示録』にアクセスしていただきまして、ありがとうございます。本来ならこの場所で、ライブでやっているところなのですが、非常事態宣言を受け、オンライン発信に致しました。しばらくはそのようにしますが、私たちの願いとしては、やはり皆様とこの場所でお会いするのがベストです。というのは、終わった後で色々質疑応答というか、私も色々なお話を聞けるのが楽しみなので、これが解除された暁には、是非またこの会場までお出かけ頂いたら本当に幸いです。

ところで、この新型コロナウイルス、日本では延べ 30 万人の方が感染しました。そして、今までに 4200 人の方々が亡くなりました。世界的スケールでは 9200 万人が感染して、200 万人が亡くなったんです。実に厄介な流行り病（はやりやまい）なんですね。

世界的蔓延で考えると、1 番多いのはアメリカ。感染者の 1/4 がアメリカですが、不思議なデータが出て来ているんです。アメリカでは昨年の死者の数が例年よりも 70 万人も少ないと。コロナが蔓延すればするほど、死者の数が減っている。アメリカでは毎年約 300 万人が色々な病気で亡くなるのですが、昨年は 230 万人。いつもの年よりも 70 万人も減っている。

これはアメリカだけの現象ではありません。日本でも毎年 140 万人ほどの方が亡くなっています。日本ではどんどん出生率が減って、大体 90 万人とか 85 万人とか。140 万減って 80 万しか増えない。その誤差を考えると、あと 100 年で日本の人口は 5 千万人になると言われています。半分以下になると。

それはちょっと横に置いて、昨年 1 年間のデータを見ると、死者が 3 万人減っているんです。去年 10 月の 1 カ月間だけのデータで幅は短いのですが、特にインフルエンザの罹患率が例年の 1/1500。不思議なことに、コロナウイルスが蔓延すればするほど、同じコロナの種類であるインフルエンザウイルスが遠慮して、広がることが出来ない。手洗い・うがいを励行しているからではないかとか色々な説があるけど、本当の理由はよく分からない。だけどデータ・数字ではっきり言えることは、コロナの死者や感染者が増えれば増えるほど、死者全体の数は減る。

私はそのデータを見たとき、こう思いました。「悪い事が起こっているときは悪い事ばかりに目が行きがちだけど、悪い事が起こっているときには良い事も秘かに起こっている。」

聖書の神は、罪に犯されたこの世界に対して、良き働きかけをいつもしてくださっている方です。人類歴史の中で最も悪い時代は今ではありません。今は恵みの時・救いの日です。聖書から見て、最も悪い時代は患難時代です。それは 7 年間続きますが、最初の 3 年半だけで世界人口が半分になる恐ろしい時代。この最も悪い時代に、最も良いわざが進むのです。人類史上最も多くの方がイエスによって神に立ち返る期間が患難時代だ、ということも出来るんですね。

そこで今日は、患難時代についていよいよ詳しく語られている黙示録 11 章。全部やろうと思ったけど、やってるうちに「これは 1 時間では無理だ。」今日は 6 節までにしたいと思います。

最初に、今日お話をすることをざっくりとした流れで申し上げます。

やがて人類は7年間の患難時代という最悪の期間に入ります。患難時代は前半と後半に分けられて、11章では3つのことが描写されています。前半部分で2つ、そして、ちょうど真ん中の後半3年半の頭に当たることが3つ目が出て来ます。

前半部分の1つ目。なんとユダヤ人がエルサレムに神殿を再建し、動物のいけにえを献げながら、2000年ほど前にやっていたあの神殿での礼拝を再現している。

神殿が建てられ、祭司が立てられ、動物が殺され血が流されて、旧約聖書に出て来る礼拝の再現が、前半3年半のどの時点かでスタートしています。もしかしたら、頭からスタートしているかもしれません。少なくとも後半が始まる前に、神殿礼拝が再現しています。

2つ目は、神殿礼拝で敬虔に神を礼拝しているように見えるユダヤ人に対し、二人の証人とされる人物たちが出て来て、内容的にはこう言うんです。

「神殿礼拝は無駄なことだ。真（まこと）の神殿とは人となられたメシア/イエス・キリストである。動物の血を携えてそこで礼拝していても、神の前には無駄な礼拝だ。」恐らくそういう内容だと思います。それを非難し、本当のメシアであるイエスに立ち返ることを舌鋒鋭く語る二人の預言者。彼らによるユダヤ人伝道が始まります。

3つ目。ユダヤ人伝道の二人の活動は、突如終わりを迎えます。二人の活動期間は1260日限定。

なぜ、もっと長く続けられなかったのか？殺されるんです。二人の証人に攻撃を加え、戦って勝利し、彼らを殺す人物が出て来ます。その事件が起こるのが、ちょうど3年半のど真ん中。

後半3年半が始まる頭に、反キリストと呼ばれるヨーロッパから出る独裁者が「俺が神だ！」と自らを神宣言し、世界中に自分への礼拝を強要するようになるんですね。そこまでが1-6節。

まず神殿礼拝が再開し、それに対して二人の証人が悔い改めのメッセージを語り、その活動を突如止めるのが反キリスト。彼はそれまでは紳士的に振る舞っていたけど「神は俺なのだ」と名乗り、ここで正体を明らかにする。こういう流れです。

今日読む黙示録で、そういうことが頭にスッと入って来るために、3つのポイントで言葉の説明をしたいと思います。聖書は専門用語で書かれているため、パッと読んだとき、よく分からないのです。

そこで、聖書が言っている言葉はどういう意味かを3つ紹介します。

- 1) 神殿の礼拝についてお話しします。神殿における礼拝とはどういうことか。それは可能なことなのか。
- 2) 今日出て来る“測れ”という言葉、“測る”は旧約聖書でどのように使われているのか。
- 3) 二人の証人とは誰か。何者か。

この3つが分かると、ご自分で黙示録を読むとき、スッと繋がるのではないかなと考えます。

1) 神殿の礼拝について。

黙示録 11:1 それから、杖のような測り竿が私に与えられて、こう告げられた。「立って、神の神殿と祭壇と、そこで礼拝している人々を測りなさい。」

神の神殿、ユダヤ人の神殿は歴史上2つありました。

1つ目の神殿はソロモンの神殿で、建てられたのはBC950年。しかし、BC586年に燃やされて炎上。

これで1つ目の神殿は灰塵（かいじん）に帰し、なくなってしまいました。BC586年、この年号は覚えた方がいいと思います。“神殿炎上させやがって586（このやろう）”と覚えたらどうですか？ユダヤ人はこの事を非常に痛みに思っているわけですね。こうして1つ目の神殿が終わります。

しかし、同じ場所に再び神殿を造ります。BC586年にエルサレム神殿（ソロモン神殿）を炎上させたのはバビロンという国のネブカドネツアル王です。彼によって都が滅ぼされ、国が滅ぼされただけでなく、ユダヤ人たちは捕囚として引っ張って行かれました。だけどバビロンが滅びた後、ユダヤ人は戻って来て、前の神殿があった場所に2つ目の神殿を建てます。第二神殿。これが建てられたのはBC516年。私の名前は516（ごういちろう）。実にめでたい名前だと、そうやって覚えてます。しかしこの第二神殿は、ユダヤ戦争の結果、AD70年にローマ帝国によって滅ぼされ、炎上して跡形もなくなってしまいました。

今読んでいる黙示録はいつ書かれましたか？AD96年頃です。つまり、ヨハネが黙示録を書いている時点では、エルサレムの神殿はどこにも無い。では、ここで言っている神殿は、どの神殿を指しているのか？未来に再建される神殿なんですね。これは3つ目なので第三神殿と、ある人たちは呼んでいます。

第三神殿はいつ建つのか？どのようにして建つのか？
実は、この神殿が建てられていることが、患難時代において非常に大きなしるしになります。第三神殿で「我こそは神だ！」と宣言する反キリストのために、この神殿は悪用されてしまうんです。再建されるけど、これはいい神殿ではなく悪用される神殿。

第三神殿はいつ建つのか？聖書を見ると、少なくとも後半3年半の前には建っているけど、いついつだと期日を限定することは出来ません。前半部分のどこかで再建されるのか、患難時代が始まる前なのか、いつ再建されるのかは分かりません。書いてないから。
しかし、少なくとも後半3年半に入る前に、この神殿が建っているのは間違いありません。そして、ユダヤ人はそこで、いけにえを献げて礼拝しているのです。

どうやって建つのか？そんなことが出来るのか？と私たちは思うのですが、第三神殿の再建を本気で考えているグループがあるんですよ。神殿再建財団。私はそのトップ/最高責任者に2回インタビューしたことがあります。今日は、そのインタビューの内容に基づいてお話をしています。
そのトップの名前はゲルシヨム・ソロモン。ソロモンて、第一神殿造った人の名前やん。
「私は神から特別な任務を与えられました」みたいな感じで。作家の野坂昭如（のさか あきゆき/1930-2015）そっくり。ゲルシヨム・ソロモン。

この神殿再建財団にラビがいて、名前がラビ・ハイルリッチマン。この人が実に、不誠実という言い方はしたくないけど、1回目インタビューして2回目の時、待ち合わせ場所に現れなかった。異邦人の奴らと話したくないと思ったんでしょう。或いはウツカリしてたの？
どんなに連絡取ろうとしても駄目だったのを覚えています。

それから、チーフに女性秘書がいて名前がバテシバ。聖書がよく分かっている方は「なんで、そんな名前付けるん？」ソロモンのお母さん。ダビデの姦淫の相手ですよ。人妻なのに。
断片のメモしか見つからなかったのですが、彼らは神殿再建が必ず起こると本気で信じています。

今はどこにも跡形もないのですが、聖書を見ると、神殿を建てる時は金槌やノミの音をさせてはならないと書いてあるから、建つときには現代工法のように様々なパーツを色んな所でこしらえて、ブロックを積み重ねるみたいにパッと造ったら、数か月ですぐ出来る。

神殿が出来たとき、神殿の中で使う器具が揃ってないと困るので、今は神殿の建物ではなく器具を作っています。その種類は99種類。「そんなにあったかな？」と思って聞いたら、例えば、大祭司は胸当て・ターバン・亜麻布・ざくろの鈴などの特別な装束を身に着けます。それがどんなものだったのか、色んな文献などを調べて、私が行った時点で8つ出来ていると言っていました。

彼らと会ったとき、この本をプレゼントしてもらったんです。『THE ODYSSEY OF THE THIRD TEMPLE』。これには、彼らで作っている色んな器具が載っています。例えばメノラー。既に出来上がっていて24金なんですよ。24金の金を42kg使って、溶接とか無しで、打ち付けながら作った物。材料費だけで3億。それが今どこにあるかという、嘆きの壁の前の真正面に階段があるのですが、その階段の所にドーン！本物かな？これ。本物らしい。いや、本物やと。

他にも竖琴。銀のラッパ。全部この本の中にある。表紙は契約の箱。彼らはそういう物を作りながら、完成したらすぐにでも動物を献げるあの礼拝を再現出来るように準備している。本気でそれを考えています。

彼らと会ったのはずいぶん昔ですよ。そのときまだPL0が元気だったんです。ゲルシヨム・ソロモンが「私はPL0の暗殺者リストのナンバー2だ」と言いました。「私は今、命を狙われています。」なぜ命を狙われるのか？彼の発言内容が神殿再建だから。

神殿は好きな所に建てていいんじゃないんです。どこに建てるのかは決まっている。第一神殿があった所に第二神殿が建てられたように、第一・第二神殿があった所に第三神殿も建てることになります。そこは“モリヤの山”と言われている所。“神殿の丘”という名前も付いている所。現在、イスラム教の黄金のドームなどがある、あの場所ですよ。

エルサレムはイスラム教にとって、メッカ・メディナに次いで第3の聖地と言われています。第3の聖地のあのモスクと黄金のドーム、ドームの所に岩があるんですが、その岩の上に白い馬に乗ったムハンマドが天に帰って行ったという伝承があって、イスラームにとっても聖なる所と言われているんです。

そんな所に、どうやってユダヤの神殿を建てる事が出来るのか？今でもここに入るのはすごく大変。まず持ち物検査。持って入ってはならない物が聖書。昔神殿が建っていた場所に聖書を持って行くと、私たちはそこで「ここに神殿があった」という箇所を開いて、読むじゃないですか。危険思想だと言うんですよ。だから、神殿時代のイラストなどを持って行くと大トラブルになります。怒鳴り込んで来ます。なのでトラブルにならないように、持ち物検査で厳重チェックされる。

イラスト持って行くだけでクラッシュするなら、本物の神殿が建つなんてこと、なんであり得ますか？そんなことしたら、おびたしい血が流されるに違いないわけで、一体どうやって建てる事が出来るのか？聖書全体を見ていくと、何となくそれが分かるんです。断言しないけど、私はこうじゃないかなと考えています。

7年間の患難時代に入る前に、少なくとも2つの大事件が起こります。

1つは携挙。キリストが空中まで来て、名目上のクリスチャン・自称クリスチャンではなく、本当に救われている、イエス・キリストを信じているクリスチャンたちを、皆天に引き上げてくださる。これが携挙。

その瞬間、世界の様相はガラッと変わる。1番大きく変わるのはアメリカだと思います。

今度のアメリカ大統領選挙で親トランプ派は、ほぼほぼ皆クリスチャンですね。

だから彼らの政治集会は、必ず祈りで始まって祈りで終わるでしょ。アメリカの大きな勢力の部分が忽然と姿を消したとき、その後のアメリカは、中南米の国々の1つに過ぎなくなるんじゃないですか？

2つ目の事件。携挙よりも後か先か分からないけど、エゼキエル戦争が始まる。

エゼキエル戦争とは、ロシアが幾つかの連合国を率いて、イスラエルに侵略戦争をするんです。

そして、イスラエルの領土内に入った後、超自然的な8つの災害が彼らの上に振りかかり、彼らは同士討ちや様々な災害・天災で全滅します。全滅するだけでなく、彼らを送り込んだ母国が滅ぼされます。

エゼキエル 39 章にそう書いてあるんですね。

ところで、ロシアの同盟国はペルシア（イラン）とベテ・トガルマ（トルコ）と書いてあります。

イランはイスラム教シーア派の大国。トルコはイスラム教スンニ派の大国。

この2つのイスラムの大国がイスラエルに入ったとき、どこを押さえたいと願うか？

イスラム第3の聖地を狙うのは当然だと思いますね。この聖地をイランとトルコが競い合うようにして、恐らく神殿の山の所に真っ先に入るんじゃないですか？

武力で押さえようとして第3の聖地に入るなら、そのエリアに8つの災害が下りますね。

その結果、神殿の山は恐らく更地になると思います。イスラエルの軍事力で、黄金のドームやアルアクサ寺院を撤去するなんてことをしたら大戦争ですよ。そんなことは、とてもじゃないけど出来ない。

しかし、エゼキエル戦争の結果、ここが更地になったらどうなりますか？

どの部分がどうなるか断言は出来ませんが、私は長年ずっと聖書預言を見ながら、その確率は非常に高いのではないかと考えています。

さて、エルサレムは神殿が建てられる場所ですが、そのことに大きな力を発揮するのが反キリストです。

2) 今日出て来る“測れ”という言葉、“測る”は旧約聖書でどのように使われているのか。

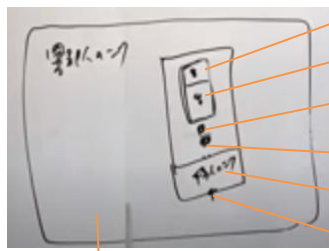
黙示録 11:1 それから、杖のような測り竿が私に与えられて、こう告げられた。「立って、神の神殿と祭壇と、そこで礼拝している人々を測りなさい。」

測りなさい。文字通り取るなら日本語では“測量”。「神殿と祭壇と、そこで礼拝している人々を測りなさい。」「そうかあ」となる。だけど、測るという言葉は旧約聖書を見ると5つくらい意味があるんです。単にメジャーで長さや幅などを測定すること以外に幾つか意味があるので、それを考えたいと思います。

黙示録 11:2 神殿の外の庭はそのまましておきなさい。それを測ってはいけない。それは異邦人に与えられているからだ。彼らは聖なる都を四十二か月の間、踏みにじることになる。

2 節には測らなくていいものが出て来ます。測るものは 1 節の神殿と祭壇と、そこで礼拝している人々。測らなくていいものは異邦人と異邦人の庭。では、測るとはどんな意味なのか？

2000 年前ヘロデ大王時代、神殿の山に特別な場所がありました。(祭壇から至聖所までが礼拝する場所)



異邦人の庭

神殿（聖所と至聖所）と祭壇を測れ。祭壇までは一般のユダヤ人男性は行けます。しかし、聖所は祭司、至聖所は大祭司しか入れません。

11:1 神殿と祭壇と、そこで礼拝している人々を測りなさい。ここの測るの意味は“神の所有権が及ぶ範囲を測る”

詩篇 60:6-7

6. 神は聖所から告げられました。「わたしは喜んでシェケムを分け スコテの平原を測ろう。
7. ギルアデはわたしのもの。マナセもわたしのもの。エフライムはわたしの頭のかぶと。ユダはわたしの王笏。

シェケムはヨルダン川の西側にある主要な町。スコテの平原はヨルダン川の東にある平原。
ギルアデはヨルダン川の東側にある主要な町/エリア。マナセの半部族はヨルダン川の東側に住んでいました。「スコテの平原を測ろう。わたしはスコテの平原というヨルダン川の東側を測ろう。」

つまり、ヨルダン川の主要エリアであるギルアデはわたしのもの。マナセもわたしのものと書いてあるように、ここでの測るは、それは神の所有権が及ぶ範囲なのだと知っているのです。
わたしのエリアだから、わたしの持ち物だから測る。

もし皆さんが他の人の家の土地を勝手に測量したら、どつき回されますよ。「お前、勝手に何してんねん！」自分の所だから測るんですよ。「わたしの所有権が及ぶ範囲のものです」ということです。

哀歌 2:8 主は、娘シオンの城壁を打ち壊そうと決め、測り縄でこれを測り、滅ぼすことから手を引かれなかった。壘と城壁は悲しみ嘆き、ともに崩れ落ちた。

哀歌はエレミヤという預言者が書きました。エルサレムの陥落を嘆いて歌っています。

娘シオンは人間のことでなくエルサレムのことです。

普通は建設するためにメジャーで測って設計して、そして建て上げて行くでしょ。

測ることによって壊すことを決めるんです。ここの測るの意味は“吟味する・判定する・検査する”

今から 15 年くらい前の姉齒（あねは）事件、覚えてはりますか？一級建築士の姉齒という人がどこかの建設会社に頼まれて、工事を安く上げるためにむちゃくちゃデタラメな強度計算をして、震度 5 の地震で全壊するような殺人マンションを量産したんですよ。ご家族はもう大変な目に遭った。

そのとき、正直なちゃんとした認定機関が、まず強度設計書を調べて測り直した結果、震度 5 で壊れることが分かったんです。その場合、震度計算式に基いて測る測りというのは、認定検査している。吟味している。判定している。検査して、そのものの本質を吟味して、最終的に判定を下す。それがここで言っている測るの意味です。

ということを考えて、もう 1 度黙示録 11:1 神の神殿と祭壇と、そこで礼拝している人々を測りなさい。これは、「これらが建っている所も、そこで祈って礼拝している人々も神のもので、それらを吟味したところ背教状態にある。不合格」という意味だと私は信じています。動物を献げて・血を献げてというのを見てたら一見敬虔な姿に見えるけど、彼らはメシアを拒んでいるユダヤ人たち。

新約聖書のヘブル人への手紙は、まだ神殿があった時代の手紙ですが、神殿で礼拝するのは全く無駄だと繰り返し繰り返し語っています。もしその時代もユダヤ人がイエスを信じたら、ヘブル人への手紙を絶対学ぶと思います。そこに行って礼拝することはないと思いますよ。

だから、ユダヤ人であるがゆえに、アブラハムの子孫、アブラハム・イサク・ヤコブの子孫であるがゆえに、彼らは神の前に所有権が及ぶ覚えられている者だけど、彼らがやっていることは背教の礼拝・メシアを拒絶している礼拝である。それで吟味の結果、背教認定を受けているということだと思えます。

さて、測らなくていいものが黙示録 11:2

神殿の外の庭はそのままにしておきなさい。それを測ってはいけません。それは異邦人に与えられているからだ。彼らは聖なる都（エルサレム）を四十二か月の間、踏みにじることになる。

神殿の外の庭（異邦人の庭）はそのままにしておきなさい。別訳の聖書では神殿の外の庭は無視しなさい。ギリシア語で“無視する”と訳すことも出来るそうです。直訳は外に投げなさい。

それは異邦人に与えられているからだ。異邦人の庭と異邦人についてはそのままにしておきなさい。意味は「吟味するまでもない。なぜなら、彼らは後半の 42 か月/3 年半の間、エルサレムを蹂躪するつもりでそこにいるのだから。」

患難時代後半の 3 年半は、エルサレムがユダヤ人ではなく異邦人によって蹂躪されるんです。後半 3 年半の頭に、蹂躪の狼煙（のろし）が上がるんですね。

その狼煙がマタイ 24:15-16

15. それゆえ、預言者ダニエルによって語られたあの「荒らす忌まわしい者」が聖なる所に立っているのを見たら—読者はよく理解せよ—

16. ユダヤに居る人たちは山へ逃げなさい。

聖なる所とは聖所のことです。或いは至聖所かも知りません。聖所か至聖所に荒らす忌まわしい者が立つ。旧約聖書で忌まわしい者とは偶像のことです。

すなわち、患難時代後半は、反キリストの形をした偶像が神殿の聖なる所に安置される。そして「皆これを拝め。いけにえを献げるのなら、反キリストの偶像に献げよ」ということを、ユダヤ人だけでなく全世界の人々に強要するようになります。だから「無視しなさい。吟味するまでもない。後半 3 年半/42 か月間、エルサレムは異邦人に蹂躪されます」ということですね。

ですから、第三神殿は反キリストによって悪用される神殿であると言えます。

3) 二人の証人とは誰か。何者か。

最も悪い時代の患難時代に、神は最も良い働きをやめません。その最も良い働きを実行するために、神によって立てられた器が二人の証人です。

二人の証人は主にエルサレムを中心に、ユダヤ人伝道のために遣わされます。

異邦人伝道は14万4千人の人たちが世界中を駆け巡りましたが、二人の証人はユダヤ人に向けてイエスの証しをするんですね。二人の証人を3つのポイントで考えたいと思います。

黙示録 11:3 わたしがそれを許すので、わたしの二人の証人は、粗布（あらぬの）をまとって千二百六十日間、預言する。

1. なぜ2人なのか？語る相手がユダヤ人だからです。ユダヤ人は1人の証言では受け入れません。

聖書には“2人の証言者でないとでっち上げかもしれないし、思い違いをしているかもしれないから、2人の証言が一致しなければ採用出来ない”ということで、証言者はいつも2人以上です。

異邦人の場合は、そこをそんなにこだわらなくていいかも分かりませんが、本当に神によって立てられた証人なら必ず2人。そういう意味合いで、真実な証言、証言者はいつも2人以上なので、二人の証人としたのだと思います。

2. 彼らのメッセージはどんなメッセージか？ひと言で言うところ“悔い改め”のメッセージです。

それが分かるのが、わたしの二人の証人は、粗布をまとって。

粗布をまとるのは深い悲しみを表現するため。「私は神の前にとんでもない罪人でした！」と悔い、「その忌まわしいことから離れたい！」という思いで神の前に出ようとするとき粗布を着るんです。

着心地の良いすべすべした着物ではなく、ゴワゴワした粗布をまとることによって、「神に背いたことをこんなにも悲しんでいます」と表現する。この悲しみ・苦しみを伴うメッセージです。

粗布を着ることによって、「あなた方もこのように悲しまなければならないんだ。あなた方が今していることは大きな間違いなんだ」と語っていると思います。

彼らは主にユダヤ人に向かって語るのですが、もし患難時代の初めから神殿礼拝が再開しているということならば、恐らくその当時のユダヤ人たちは、ある意味有頂天になっているかもしれない。

「2000年来、先祖たちが願っても実現しなかった神殿が再建されて、先祖たちがやっていた動物を献げる礼拝がそのまま実現している。そんなことを実現した私たちは、なんと神に選ばれた者、喜ばれている者だろう！」と喜んだかもしれません。何もかも上手く行っていると安心しているかもしれません。

しかし二人の証人は、「その礼拝は無駄。あなた方は動物をいけにえにして神に近づいているが、人が神に受け入れてもらういけにえは、もはや動物ではない。神が遣わした救い主イエス・キリストの犠牲だけが、神をして人を受け入れさせる力あるものである。イエスを拒否しながら、どんなに旧約聖書の律法の通りにいけにえを献げていたとしても、それは礼拝にはなっていない。無駄なことだ。しかも、あなた方の礼拝の安全を保障しているのは反キリストではないか。」

ダニエル書を見ると、反キリストは1週（7年）の間、多くの者たちと堅い契約を結ぶ。

その契約のゆえに、このような礼拝の自由が与えられているんですね。しかし、それは立派な人ではなく悪魔の手先。その正体がなぜ分からないのか？恐らく、この黙示録を使うんじゃないでしょうか。

その結果、ユダヤ人たちは耳を傾けるようになるんですね。

今日の箇所だけ見ても分からないのですが、大勢の人たちが山へ逃げるようになるので、ユダヤ人は二人の証人のメッセージに耳を傾けるようになると思います。

3. なぜ耳を傾けるのか？私は3つ理由があると思うんですね。

耳を傾ける理由① 黙示録 11:5-6

5. もしだれかが彼らに害を加えようとするなら、彼らの口から火が出て、敵を焼き尽くす。もしだれかが彼らに害を加えようとするなら、必ずこのように殺される。

6. この二人は、預言している期間、雨が降らないように天を閉じる権威を持っている。また、水を血に変える権威、さらに、思うままに何度でも、あらゆる災害で地を打つ権威を持っている。

ただ言うだけのメッセンジャーではないんです。奇跡が伴うメッセンジャー。しかも、それはささやかな奇跡ではなく、旧約聖書に大預言者として立てられた人物たちが行ったのと同じような奇跡。

例えば、雨を降らせない。これは預言者エリヤの奇跡。水が血のように真っ赤に変わった。これはモーセの出エジプトの時の奇跡。つまり、旧約聖書の彼らは神が立てた者たちだから彼らの言葉を聞け。

彼らが神に立てられた証拠は、この奇跡を見たら分かる。

二人の証人が彼らと同じような大きなスケールの奇跡を行うことで、言いつ放しの人たちではなく、紛れもなく神によって立てられていることを、奇跡という裏付けによって認めるようになるんですね。

耳を傾ける理由② 二人の姿を通して、預言の成就を見るから。

黙示録 11:4 彼ら（二人の証人）は、地を治める主（全地の主）の御前に立っている二本のオリーブの木、また二つの燭台（しょくだい）である。

初めて黙示録を読む方には、これは何かよく分からないのですが、旧約聖書に精通しているユダヤ人がこれを読んだら、ピンと来る箇所があるんです。それはゼカリヤ書 4章。

ざっと言うと、バビロンに連れて行かれたユダヤ人たちは、もう1度エルサレムに戻ります。

戻ったユダヤ人に遣わされた預言者の1人がゼカリヤ。ゼカリヤはあるとき幻を見ました。

その幻は、1つの燭台があって、その両側に右に1本・左に1本のオリーブの木がある。そのオリーブの木から燭台に向かって金のチューブが繋がっていて、金の油が流れている。金の油は黄金色の油、つまりエキストラバージンオイル。全く酸化していない。超高級・搾り立てのバージンオイル。

燭台は照明器具です。イスラエルは異邦人の国々に向かって、「イスラエルの神こそがあなた方の神で、約束を守り抜かれる創造主なのだ」ということを告げ知らせるために立てられた燭台なんですよ。

しかし、燭台は自力で光を輝かせるのではなく、油の供給を受けないとダメ。

送り込まれるオリーブオイルを燃料にして、灯火（ともしび）を灯（とも）して行く。それが燭台ですね。

滅ぼされたユダヤ人たちがもう1度元に戻って、その場所に行って神殿を建てている。

それを見るということは、異邦人の世界にとって、神殿再建を約束していた預言者の言葉がそのまま成就することなので、ユダヤ人の神は生ける真の神だということが示されるのです。

その意味で、1つの燭台はイスラエル。イスラエルを励ますために2本のオリーブの木がある。

これは政治的リーダーのゼルバベルという人物と、宗教的リーダーの大祭司ヨシュア。

政治的リーダーと宗教的リーダーに励まされることによって、何度もくじけそうになりながらも奮い立ち、神殿建設に取り掛かって行くということです。直接的にはそのことを語っているのですが、同時に終末預言も語るんです。

ゼカリヤ 4:11, 14

11. 私は彼に尋ねた。「燭台の左右にある、この二本のオリーブの木は何ですか。」

14. 彼は言った。「これらは、全地の主のそばに立つ、二人の油注がれた者だ。」

先程は、地を治める主（全地の主）の御前に立っている二本のオリーブの木。地の支配者である主の前に立てられた二本のオリーブの木。

ここでは、全地の主のそばに立つ、二人の油注がれた者。

政治的リーダー・宗教的リーダーによってユダヤ人の心が鼓舞されて行ったように、終末時代、残りの者のユダヤ人を励ますために、神は聖霊の力によって大胆に証しする二人の証人を遣わされた。

二人の証人の姿を通して、「旧約預言/ゼカリヤ書の預言の実現を、今私たちは目の前で見てるんだ。」つまり、旧約預言自体が二人の証人の身分証明書になるんです。「俺たちは本物だ。本物だ」と自分たちだけで言うのではなく、聖書が彼らを保証する。支える。身分証明書になっている。なので、当時のユダヤ人たちは、それを認めて行ったのではないかなと思います。

黙示録 11:4 彼らは、地を治める主の御前に立っている二本のオリーブの木、また二つの燭台である。

ゼカリヤの時は1つの燭台に2本のオリーブの木。ここでは2つの燭台・2本のオリーブの木。

つまり、二人の証人の両方共が、闇のイスラエルを照らす燭台になって行く。

恐らく非常にキツイ、耳に痛い鋭いメッセージなのに、同時に、燭台を見るように二人の預言者を見ていたように思うんです。彼らは、罪の告発と同時に救いを語っていますね。

「我々は間違っていたのだ。ならば、どうしたらいいのか？」

断罪だけで終わるのではなく、イエスを信仰によって受け入れる、ユダヤ人の心をイエスに振り向かせるようなメッセージを語っていたのではないかと思います。

二人の証人は誰かというのは、この時代にならないと分かりません。

モーセとエリヤだと言う人もいるけど、そうではないですね。二人は後で殉教、殺されて、その後復活します。モーセもエリヤも1度死んでいるから。死んで、もういっぺん死ぬんですか？と。

聖書の教理上、それはおかしいと思います。

患難時代のこのときにエルサレムにいるユダヤ人たちの中で、イエスをメシアと信じ、特別に神に召された二人の人物。それが誰かは、今、私たちには分からないということだと思います。

ところで、黙示録 11:3 わたしがそれを許すので、わたしの二人の証人は、粗布をまとって千二百六十日間、預言する。なぜ、千二百六十日が前半の1260日だと分かるのか？

黙示録 11:7 二人が証言を終えると（すなわち1260日が終わると）、底知れぬ所から上って来る獣が、彼らと戦って勝ち、彼らを殺してしまう。

底知れぬ所はギリシア語でアブソス。死後の世界の中で、悪霊たちが閉じ込められる場所。

底知れぬ所（アブソス）から上って来る獣（反キリスト）は、1度殺されたにも拘らず生き返った。

二人の証人はこの反キリストによって殺されます。

反キリストは1度暗殺されますが、それは患難時代後半の頭です。なので、二人の証人の1260日の活動期間は前半であると言えるのではないかと私自身は考えています。

さて、殺されてしまって、続きはどうなるんだろう。

殺された二人の証人は3日半の間、遺体が見せしめにされるのですが、やがて復活し、携挙するんですね。詳しいことは次回、また皆さんと考えたいと思います。

最後に、ここから少し考えたいことがあります。

黙示録 11:4 彼らは、地を治める主の御前に立っている二本のオリーブの木、また二つの燭台である。

地はイスラエルの地。この時のイスラエルは、どこをどう見ても神様が支配しているようには見えなかった。悪い悪の勢力が支配しているようにしか見えないんです。

ところが聖書は、「見かけ上は悪が支配しているように見えるかもしれないが、本当の支配者は主なんだ！」とここで言っているのです。

私は昨年末、起きたら右の耳が聞こえなくなっていたんです。何か物が詰まっているような感じ。

「聞こえへん。聞こえへん」と言ったら、家内から「それ、突発性難聴や！ほっといたら一生聞こえなくなる！」とか色々言われ怖くなって。聞こえないことより、その言葉の方が怖くなって「分かった。行くわ。行く。」隣の駅の耳鼻咽喉科に行きました。前行った時、すごい混んでたんですが、さすがコロナですよ。ガラガラや。

聴力検査やったら右だけ聞こえてない。「これは突発性難聴ですから、すぐに治療しましょう。」

ステロイドホルモンを大量に。「通ってする時間がない」と言ったら「経口式でやりましょう。」

大量にホルモンを飲んで、初期にそれをやったので非常によく効きました。

聴力検査をした結果ものすごく回復してたんですが、5年前にも聴力検査をして、それよりかは2割ほど聞こえてない。「これ、完治してないんじゃないですか？」「あ、この部分は…老化ですねえ。老化は副腎皮質ホルモンでも治りません。」そうか。老いか。それはそれで良かった。

「ですから、今日で終わりです。完治したと考えてください。」「先生、ありがとうございます」と言った後で、ドクターがこう言ったんですね。

「高原さん、探らないでくださいね。」「え？探らないでって？」「探さないでくださいね。」「何を探す？」「『まだ、ちゃんと聞こえてないのでは？』ということ、神経質になって探さないでください。突発性難聴を患ったうちの何割かは『まだ治ってないんじゃないか？まだ治ってないんじゃないか？』ということにこだわるあまり、耳鼻咽喉科から心療内科に移ることになります。」

「そうなんですか。」「そうです。聞こえないんじゃないか？前のようじゃないんじゃないか？耳鳴りがしてるんじゃないか？と気に病むようになって、ずっと思い煩っているうちに、ノイローゼ状態になってしまうので探らないでください。」

「探らないようにするには、どうしたらいいんですか？」「そうですねえ。良い音楽・小鳥の声・美しい声の朗読とか、何かウツリするようなものに聞き入ったら、そんなん忘れちゃって。」

若いドクターが言ったんですが、これを聞かせるために、今回突発性難聴になったんちゃうかと。

皆さん。自分自身の至らないところをずーっと気に病んで見てたら、元気になんかなるものですか。私たちは生きてたら本当にヒドイ世の中を見て、アメリカ大統領選挙の結末を見てですね、そんなん見てたらイライラするし、気に病むし。

世の中を見て、自分の心を見て、或いは自分の暗い生き立ちを見て、昔やらかした大失敗を見ていても、そんなものを見ていても、そこには希望はないですよ。少しも力は湧いて来ない。

どうしたらいいんだらう？ウツトリするような音楽みたいな、素晴らしい甘美なメッセージがあります。それは神の言葉です。福音です。聖書の言葉です。聖書の言葉は、神はどんな方かを明らかにします。

ここを見ると、神は地を治める主なんです。見かけ上は反キリストが治めているように見えても・見かけ上は疫病が繁栄しているように見えても・見かけ上は悪霊の働きがたくさんあったとしても・見かけ上は半分の命を落とす悲惨な状態であっても、そんな世界であっても、一向に滞ることなく良き働きを進めている支配者がおられる。

今は患難時代ではありません。恵みの時代・救いの時代に私たちは生きています。患難時代のような生き立ちの方や、患難時代に1人取り残されているような心境で、もがき苦しみながら生きていた方がいるのではないですか？

自分を見て、過去を見て、世の中を見て、解決はないです。解決は、あなたのために死んでくださり、いや、3日目によみがえってくださったイエス・キリストの中にあるんです。

「地の果てのすべての者よ。わたしを仰ぎ見て救われよ」と聖書は語っています。このイエス・キリストの救いの中に本当の解決があるんですね。

黙示録の解説をしていますが、皆さん、ゴールはキリストなんです。是非、このキリストを1日も早く信じ受け入れてください。最後までご清聴ありがとうございました。

~~~~~

- \* 動画は YouTube で「HCA 東住吉キリスト集会」
- \* ラジオ番組「聖書と福音」(約15分)も是非どうぞ。YouTube もあります。
- \* YouTube 「ごうちゃんねる」も是非見てください。

動画筆記 : Rumi